

おおいわだかみむら

大岩田上村遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う発掘調査概要



2001

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しましては、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。このたび宮崎県教育委員会では、農用地総合整備事業「都城区域」区画整理（今町団地）に伴い大岩田上村遺跡の発掘調査を行いました。本書はその概要報告書です。

今回の調査では、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を検出いたしました。中でも、都城市では初めて検出された旧石器時代の細石刃石器群や、中世の道路状遺構は特に注目されます。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言いただいた先生方、並びに地元の方々に心から謝意を表します。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

例　　言

1. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
2. 調査地は宮崎県都城市大岩田町6809番地他に所在する。
3. 発掘調査は、平成11年11月17日から平成12年10月25日まで行った。
4. 現地での実測・写真撮影等は、南正覚雅士、堀田季博、松本茂が行った。
5. 空中写真撮影は、㈱スカイサーベイ九州に、自然科学分析は、御古環境研究所に委託した。
6. 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影等は、南正覚、堀田、松本が行った。
7. 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図を基に作成し、調査範囲図は都城市都市計画図の2万5千分の1図を基に作成した。
8. 上層断面の色調は「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修)に拠った。
9. 本書で使用した方位は、座標北(座標第II系)である。レベルは海拔絶対高である。
10. 本書の執筆は、第II章第1・2節及び第III章A区は堀田、第II章第3節及び第III章C区は松本、その他は南正覚が行った。また、編集は南正覚が行った。
11. 出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

第Ⅰ章 序説

第1節 調査にいたる経緯

緑資源公団（旧農用地整備公団）において、農用地整備事業として農業生産性の向上・農業経営の安定を図る圃場整備事業（204ha）やそれに伴う農産物流通の迅速化を目指した広域農道（総延長19.1km）建設が計画された。事業区内には多くの遺跡が分布しているため、県文化課では、発掘調査期間や面積の平準化及び調査員の確保などの課題について公団と継続して協議を行ってきている。

「今町团地」圃場整備事業区は、南北に細長く地形上、大岩田上村遺跡、宮尾・立野遺跡、諫訪免遺跡の三つの遺跡が分布しており、平成7年11月～平成8年1月にかけての試掘調査によって、それぞれの遺跡の状況が確認された。さらに、事業の具体化に伴い事業地区の拡大が計画され、再度、平成11年9月に遺跡範囲の絞り込みを目的とした確認調査によって弥生時代後期の住居跡等が検出された。

この結果をもとに県文化課は緑資源公団九州支社都城建設事業所と事前の協議を行い、工事の切り盛り関係でどうしても遺跡への影響が避けられない大岩田上村遺跡を調査対象とし、平成11年度に10,000m²を平成12年度に15,000m²の調査を実施することにした。

第2節 調査の組織

大岩田上村遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

(平成11年度)

教育長 笹山竹義

教育次長 新垣隆正

岩切正義

文化課長 仲田俊彦

文化課長補佐 矢野 剛

庶務係長 井上文弘

埋蔵文化財係長 北郷泰道

調整担当 東 篤章

(平成12年度)

教育長 笹山竹義

教育次長 福永孝義

岩切正義

文化課長 黒田正博

文化課長補佐 井上 貴

庶務係長 長谷川勝海

埋蔵文化財係長 石川悦雄

調整担当 谷口武範

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田中 守

所長 矢野 剛

副所長 江口京子

副所長兼総務課長 菊地茂仁

庶務係長 児玉和昭

総務係長 亀井雄子

調査第二係長 青山尚友

副所長兼調査第二課長 岩永哲夫

主査(調査担当) 南正覚雅士

調査第四係長 永友良典

調査員 松本 茂

主査(調査担当) 南正覚雅士

調査員 堀田孝博

調査員 松本 茂

第3節 遺跡の位置と歴史的環境

大岩田上村遺跡の所在する都城市は、宮崎県の南西部にあり、東側を鰐塚山系、西側を霧島山系に囲まれた南北に細長い盆地の中央に位置する。当遺跡は、市域南部の大岩田町に所在し、大淀川の支流の梅北川と萩原川によって東西を挟まれた標高160～180mの平坦な成層シラス（二次シラス）台地上に立地し、川面との比高は約15mである。

周辺の遺跡を眺めると、同台地上の北東端には大岩田村ノ前遺跡⁽¹⁾が位置し、縄文時代後期～弥生時代後期の竪穴式遺構等や中世の道路状遺構が確認されている。また、梅北川を挟んだ対岸の台地には、横尾原遺跡⁽²⁾と黒土遺跡⁽³⁾が位置する。横尾原遺跡では、縄文時代後～晚期の土器・石器や奈良時代の骨蔵器2基が出土したほか、縄文時代晚期前半の竪穴式住居1軒および土坑數基が検出されている。黒土遺跡では縄文時代後期の土器・石器、弥生時代前・中期の竪穴式住居跡、中世の溝状遺構や道路状遺構が確認されているが、特に、擦り切り石包丁の出土が注目される。

南西3kmには鶴尾遺跡、同2kmには坂ノ下遺跡が位置する。鶴尾遺跡では、中世の台跡及び水田跡が検出されている。坂ノ下遺跡では、縄文時代・弥生時代の土器と弥生時代後期の竪穴式住居1軒、土坑1基が確認されている。

註

(1)豊永卓爾「大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書」都城市文化財調査報告書第14集 都城市教育委員会 1991

(2)「都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内南部)」都城市文化財調査報告書第6集 都城市教育委員会 1992

(3)桑畑光博「黒土遺跡調査報告書」都城市文化財調査報告書第28集 都城市教育委員会 1994



①大岩田上村遺跡 ②五十市式土器採取地点 ③大岩田村ノ前遺跡 ④黒土遺跡

⑤横尾原遺跡 ⑥鶴尾遺跡 ⑦坂ノ下遺跡

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

第4節 調査の概要

大岩田上村遺跡は、谷等の地形によりA・B・Cの3地区に分けて調査を行った。グリッドは、国上座標に平行する形で10m四方で組み、図面の作成は平板測量で行った。調査の結果、A区では竪穴住居跡2軒、土坑墓2基、溝状遺構・道路状遺構40条、ピット群、B区では土坑1基、ピット群、C区では住居跡2軒、土坑5基、溝状遺構1条、ピット群を確認している。A・C区では道路敷設部分（6ヵ所）で確認トレンチをいれたところ土器片、石礫、細石刃核、細石刃、剥片等が出土した。



調査区全景（南から）

第5節 基本層序

本遺跡の層序は、基本的に各地点ごとに同じ様相を呈している。これを17層に大別し、さらに21に細分した。

層序	色調	特徴
第Ⅰ層	表土	
第Ⅱ層	表土	
第Ⅲ層	灰白色土	文明鮮石層(P3,Sz-Bm)自然堆積は部分的に厚さ3~15cmで残存
第Ⅳ層a	黒色土 10YR1.85./1	文明鮮石を含む(およそ2%程度)しまりやや強く粘性やや高い
b	黒色土 10YR2./1	文明鮮石を含む(およそ1%程度)しまりやや強く粘性やや高い
c	黒色土 10YR2./1	文明鮮石を含む(およそ3%程度)しまりは第Ⅳa-b層よりやや弱い 第Ⅳc層より粘性はやや高い
第Ⅴ層a	黒色土 10YR2./1	御池軽石層(Sc-M)直徑1~10mmの黄褐色粒子のみで構成 しまりややあり 粘性なし
b	黒色土 10YR2./1.5	粘性は第Ⅳa-b層と同じ程度 御池軽石をおよそ15%程度含む しまりは第Ⅳa-b層と同じ程度 粘性も同様
第VI層	黄褐色土 10YR5./8	御池軽石層(Sc-M)直徑1~10mmの黄褐色粒子のみで構成 しまりややあり 粘性なし
第Ⅶ層a	黒色土 10YR1.7./1	御池軽石+ニガの漸移層 直径1~10mmの御池軽石を10%程度含む しまりややあり ニガ層 直径1mm以下の黄褐色・白色・赤褐色粒子を多量に含む しまり・粘性ややあり ニガ層+カホキの漸移層 黒色土と明褐色土が斑状を呈する しまりやや弱い 粘性弱い
b	黒色土 10YR1.7./1	
c	黒色土 10YR2./3	
第Ⅷ層	明褐色土 7.5YR5./8	アカホヤ火山灰層(K-Ah)混入層 全面にわたり黒色土が点的に混在する しまりややあり 粘性弱い
第IX層	明褐色土 7.5YR5./8	アカホヤ火山灰層 直径1~5mmの明褐色粒子が帶状に混在 しまり非常に強く粘性なし
X層a	黒色土 10YR1.7./1	黒褐色土(10YR2./3)が40%程度混入し斑状を呈する 直径1~10mmの黄褐色粒子・直徑1mm以下の白色粒子を多量に含む しまり強く 粘性なし
b	黒色土 10YR1.7./1	P12火山灰(Sz-Ym)混入層 直径1~10mm 黄褐色粒子・直徑1mm以下の白色粒子・赤褐色粒子を多量に含む しまり非常に強く粘性ややあり
第XI層a	黒褐色土 10YR2./2	直徑1mm前後の黄褐色粒子を微量 同じく直徑2~3mmの黄褐色粒子や直徑1mm以下の黄褐色・白色粒子を少量含む しまりやや強く粘性なし 土質は第Ⅹa層と同じだが、色調が顕著に明るい
b	黒褐色土 10YR2./3	
第XII層	暗褐色土 10YR3./4	麻薙火山灰(P14,Sz-Si)混入層 直径5~10mmの黄褐色・白色粒子を微量 同じく直徑1mm以下の黄褐色・白色・赤褐色粒子を少量含む しまり強く粘性なし
第XIII層	褐色土 7.5YR4./4	上半分は中心として直徑1~30mmの暗褐色土ブロック(10YR3./4)が少量混入 直径1~3mmの黄褐色・白色粒子を微量に含む しまり非常に強くやや粘性あり
第XIV層	暗褐色土 7.5YR3./4	直徑5~10mmの黄褐色粒子を微量 直径1~3mmの黄褐色・白色粒子を少量含む しまり強く粘性なし
第XV層	褐色土 7.5YR4./4	直徑1~3mmの黄褐色・白色粒子を少量含む しまり・粘性やや強い
第XVI層a	暗褐色土 7.5YR3./4	暗褐色土と黒褐色土(10YR2./2)が混じり斑状を呈する 直径1~3mmの黄褐色粒子をこく微量に含む しまり・粘性やや強い
b	黒褐色土 10YR2./2	P17(Sz-Tk6)混入層 第XVIa層と主張が入れ替わり斑状を呈する ややしまりあり 粘性やや強い 直径1mm以下の多く種類の赤褐色粒子(P17)を少量含む
第XVII層	黄褐色土 10YR5./8	二次堆積シラス層 所により暗褐色(10YR3./6)明褐色(5YR5./6)黄褐色土(10YR4./2)を呈するなど色調の変化が激しい 一部粘土化している 直径5~10mmの黄褐色・明褐色粒子のブロックを微量に含む ややしまりあり粘性なし

第2図 基本層序

註

各テフラの名称は下記の文献による。

小林哲夫・江崎真由美「桜島火山の噴火史」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』(VII)

名古屋大学年代測定資料研究センター 1996

早田 勉「火山灰と土壌の形成」『宮崎県史』通史編 原始・古代1 宮崎県 1997



第II章 調査の記録

第1節 A区の調査

調査区全域に確認トレンチをいた結果、中世遺構の残存する可能性が高いと推測された調査区南西部（AⅠ区と仮称）は第I層を重機で除去し、第II層から人力による掘削を行なった。残りの部分（AⅡ区と仮称）については第Va層まで重機で除去した後、第Vb層で遺構確認を行なったが、多数の溝状遺構・道路状遺構やピット群、土坑墓が検出された。ここでは特に注目される遺構として第1号道路状遺構を取りあげる。

第1号道路状遺構（第4図）

調査区の北西部、1M×5Lグリッドにかけて検出された。検出全長は直線距離にして約37.5mを測り、主軸はN-15°-Eと概ね北北東～南南西の方向を取るが、北端より約26mの地点で緩くカーブしてN-42°-Eへと転じている。幅員は上面で約0.7～4.3m、深さは完掘状態で最深部約1.6mを測るが、検出面は御池軽石層（第VI層）であるため本来はさらに規模の大きいものであったと推定される。断面は大きく開くV字状を呈している。掘削は最も深い地点でP14火山灰混入層（第知層）にまで達していた。

硬化面は主として2箇所に認められた。一方は西側立ち上がりの中腹付近にある傾斜変節点に乗るような状態で約6.2mにわたって検出された。硬化面から北側にも傾斜の変節は認められ、あたかも斜面を下っていくかのような様相であるため、この部分にも硬化面が存在した可能性が高いと考えられる。

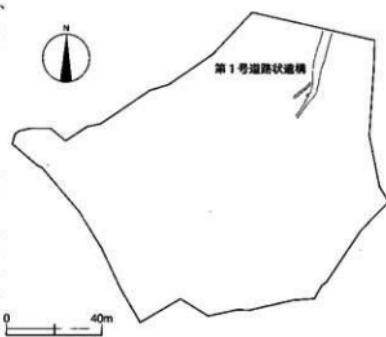
硬化面は御池軽石を含む黒色土で形成されている（硬化面A）。

他方は造構底面に非常に良好な状態で残存していた。茶褐色の鉄分が析出した屑理面を介在する6枚の層が観察された。P11火山灰を含む黒色土で形成されている（硬化面B）。

これら硬化面の前後関係について上層断面で観察してみると、硬化面Aを切るようにして硬化面Bを伴なう掘り込みがなされたことが明らかである（第5図）。断面を提示した部分では硬化面Aのちょうど対岸側にも同じような傾斜変節点があり、あたかも一連のものであるかのような印象を与えるが、他の部分では傾斜の変節や硬化面が明瞭に認められず、

さらにはこれを硬化面の痕跡と仮定するならば復元される路面が約2.7mとなり、切り通しとしてはやや幅広の感が否めない。

よって硬化面Aが通行に耐えなくなつたために中心を東側にずらしながら掘り下げて路面を再生していくものと考えられる。ただし硬化面Aの直後に硬化面Bが構築されたものか、あるいは幾度かの破損・再掘削を繰り返した後、最終的に硬化面Bの深度に達したものかは、土層断面の観察からは明らかにできなかつた。硬化面Bの下からピット列が検出されている。ピットは直線距離



第3図 A区全体図 (S=1/2,000)

にして約24mの間に37基確認された。途中にピットの空白部分があるが、残存状態が明瞭でなかったため、前後と同様な状態で存在していた可能性が高いと考えられる。ピットは長径約26~62cm、短径約19~43cmを測り、一部不整形のものも認められるが多くは楕円形を呈している。また路面の主軸方向に直交するように長径を持つピットが大半である。またこれらのピットのほとんどが道路状造構の立ち上がりに切り込むようなかたちで掘削されている点が注目される。

先述したように硬化面Bには鉄分の析出した層理面が多く観察される。これら層理面の性格としては、一枚一枚が路面であるか緻密な土木工事（版築）の痕跡であるかという二つの可能性が挙げられるが、立ち上がりに切り込むピットのプランにくわえて、硬化面を形成する上かいずれもPtl火山灰を含むきわめて等質な土であり、むしろ層理面の存在によってのみ分層が可能であること、さらに消極的ながら最下の硬化面では路面としての幅員が不足するような印象があることなどから、後者の可能性が高いと判断される。道路状造構に伴うこうしたピット列は、近接する大岩田村ノ前遺跡からも検出されており¹⁰⁾、いわゆる「波板状凹凸面」との関係が注目される。

そうした観点からピット列の掘り込まれた場所を検討してみると、比較的傾斜の急な箇所であること分かる。また一部のピットでは検出面で低レベル側にカーブの極を持つ三日月形の砂層が薄く堆積していた。大岩田村ノ前遺跡の場合、報告書掲載の図面から判断する限り、本遺跡と異なる平坦な地形に構築された遺構であるにもかかわらずピット列が掘られているように見えるが、水平に補助線を引いてみると、平坦な中でも凹地で水の流れきやすい部分にのみピットがあることが分かる（註1文献p.24~26）。これら2遺跡の所見から結論を急ぐことはできないが、排水の便を図るという説に首肯するところがある。また本遺跡の場合にはそれに加えて、傾斜部の舗装（硬化面B）が崩落することを防止するといった目的もあったかもしれない。

次に土層断面について検討を進めてみたい。断面では文明3年（1471）発生の桜島噴火による火山灰と同定されている文明軽石の厚い堆積層が観察された。第5図では文明軽石層にうすく網をかけてある。調査時の所見ではこの層は不純物がほとんどない上、火山灰の粒径が下層ほど大きく上層にいくにつれて小さくなっている、プライマリーな堆積と考えられる。またその堆積層は硬化面Bの直上まで入り込んでいる。土層断面を提示した部分ではたまたま東半分が大きく失われているが、当初はおそらく三日月状に堆積していたものであろう。その硬化面Bであるが、表層は比較的良好な状態で残存している。これらの状況から、硬化面Bは文明軽石の降下によって直接路面がパックされたものと考えられる。



土層断面（南から）



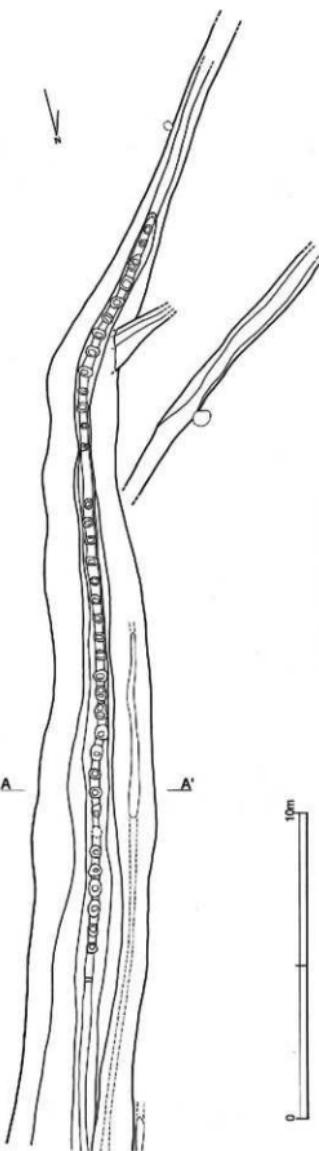
硬化面A検出状況（南から）



ピット検出状況（北から）



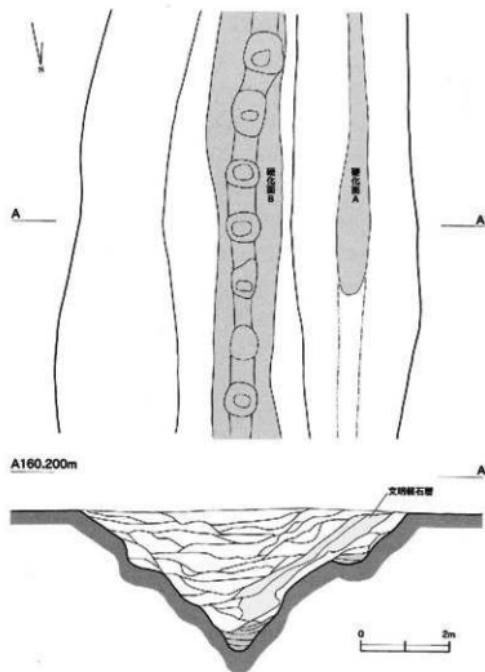
ピット検出状況（南から）



第4図 A区第1号道路状況 (S = 1 / 160)

この点からすると少なくとも硬化面Bの使用年代は15世紀中葉と見なしてよい。

問題はその後の再掘削がどのように行なわれたかである。先述したように土層断面提示部では文明軽石層を大きく削るような掘り込みが認められるが、他の箇所では文明軽石がより良好な堆積状況を示しており、この部分については局所的な搅乱と考えたほうがよい。ただしそれよりも浅い掘り込みが全域にわたりなされていたことは確実で、また他の道路状遺構では文明軽石層の上面が硬化している状況が看取された。すなわち文明軽石層下により道路が埋没した直後から復興が行なわれたことになる。なお復興の後、この道路が最終的にいつまで使用されていたかについては、遺構そのものから読み取ることは困難であった。第4図には第1号道路状遺構と切り合う、あるいは切り合う可能性の高い溝状遺構ないし道路状遺構をあわせて掲載したが、これら遺構の存在も関わってくる問題と考えられるため、本報告の時点での検討を行なうこととする。



第5図 A区第1号道路状遺構(部分)・土層断面(S=1/50)

註

(1)重永草爾『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』都城市文化財調査報告書第14集 都城市教育委員会 1991

第2節 B区の調査

第IV層まで重機で除去した後、遺構確認を行なったところ第Vb層で土坑1基とピット群を検出した。土坑からは弥生土器片・磨製石器・刀子などが出土している。ピットは埋土の状況から概ね3種類に分けられるが、明確な並びを確認することはできなかった。御池軽石層(第VI層)上面で遺構が認められなかつたため調査を終了した。

第3節 C区の調査

本地区の調査では、第IVc層～第Va・b層にかけて、縄文時代後期を主体とする土器・石器類を検出した。その後、計5箇所のトレンチを設定し、第VII層以下の遺物包含層の確認を日論んだ。

今回の報告では、第2トレンチ・第3トレンチにおいて確認した細石刃石器群以前の時期に帰属する遺物についての概要を述べる。

トレンチの設定と出土遺物

C区では、先述したように道路敷設予定の区域内に4箇所、他に1箇所のトレンチを設定し(第9図)、シラス(第X層)直上まで掘り下げをおこない、遺物包含層の確認を試みた。

当遺跡の周辺では、アカホヤ火山灰層(第V層)が良好に堆積することから、当初、縄文時代早期の遺物包含層の確認が期待された。しかしながら、第1～4トレンチでは、土器片の出土はみられず、当該期に属する石器を検出したのみであり、第5トレンチにおいてP11火山灰層の下層(第Xlb層)中に土器片1点を確認するにとどまった。これとても細片に過ぎ、特徴を把握することは困難なため、図化はおこなっていない。層位的に判断するならば縄文時代早期前半の位置付けが与えられよう。

各トレンチ毎の遺物出土状況はつきのとおりである。

第1トレンチ 本トレンチでは、遺物の出土はみられなかった。

第2トレンチ 第X層～第XV層にかけて剥片5点を検出した(第7図)。

第3トレンチ 第Xa層より二次加工有る剥片を1点、第X層～第XV層にかけて、細石刃核2点、細石刃4点、剥片5点、碎片7点を検出した(第8図)。

第4トレンチ 第Xlb層より石器1点を検出した。

第5トレンチ 第Xlb層より石器1点、土器片1点を検出した。

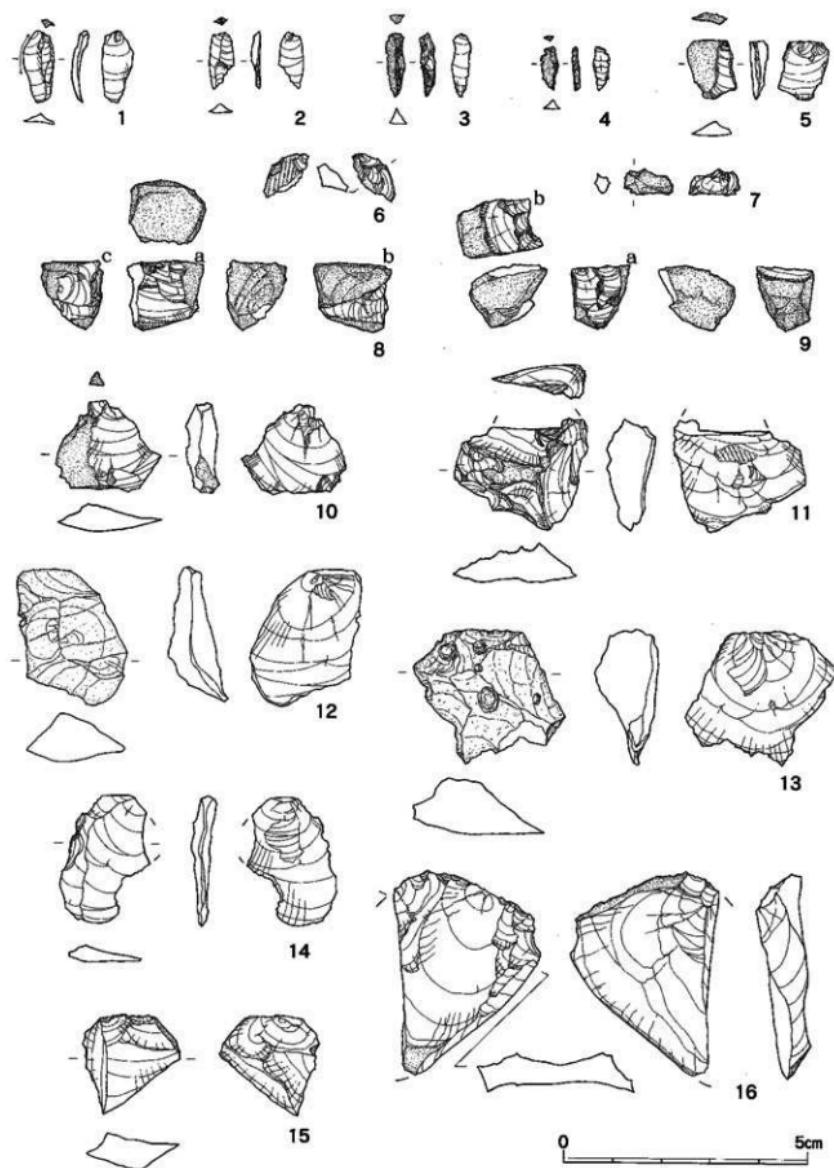
上記の遺物のうち、第2トレンチ・第3トレンチにおいて第X層以下より検出されたものの一部について図化をおこなった(第6図)。なお、以下におこなう説明の便宜のため、石器に使用された黒曜石について、以下のような類型を設ける。

黒曜石A類：夾雜物は少なく、黒色・透明を呈する比較的良質な石質。原礫面は細かな凹凸を有しザラザラとした印象を受ける。

黒曜石B類：石質は概ね良好であるが、A類と比較し夾雜物が目立つ。黒色もしくは灰黑色を呈し、透明感を有する。風化により肌がヌメっとした印象を与えるようになることが、この石材の特徴である。

以下、個別の遺物について述べてゆく(第6図)。

細石刃(1～4) 1は完形品であり、背面左側縁上部には微細な剥離痕が観察される。平坦な単剥離打面を有する。頭部形状は台形を呈し、頭部調整が施されている^⑨。2は複剥離打面を有し、頭部調整は観察されない。頭部形状は台形を呈する。背面左側の末端部に破損がみられるが、意図的な折断とは考えにくい。この破損以前に主要剥離面とは逆方向からの剥離痕が観察される。3・4はいずれも背面に原礫面を残し、これともう一方の剥離面とが形成する段階から二次加工が施されている。この二次加工はいずれも主要剥離面に切られており、細石刃剥離作業以前におこなわれた作業面調整にあたるものと考えられる。3・4ともに原礫面を打面としており、頭部調整はみられない。上記の段階調整により、



第6図 C区第2・3トレンチ出土の石器 (S=1/1)

頭部形状は改変を受けている。使用石材は4点いずれも黒曜石A類である。

細石刃核（8・9）8は計3面の作業面を有し、a面→b面→c面の順に打面転移がなされたことが推定できる。a面の剥離角は84°、c面の剥離角は81°を測る。9の最終作業面であるa面の剥離角は70°を測る。b面に観察される剥離痕についてはa面における細石刃剥離のための打面調整とも考えられる。いずれの細石刃核も黒曜石A類の小砾を用いている。

剥片（5～7、10～16）5は背面に残る原礫面の観察から、小砾素材からの剥離が推定される。連続して小型の縦長剥片が剥取されていることから、幅広の細石刃である可能性もあるが、主要剥離面にツインバルヴを有するため、ここでは剥片と認定した。6・7はいずれも小型の不定形剥片である。10は原礫面を打面とする剥片である。11は背面側からの加圧により折損している。以上、7～11は第3トレンチからの出土であり、11に黒曜石B類が用いられる他は、黒曜石A類を使用石材としている。

12～14はいずれも黒曜石B類を使用した剥片である。15・16は頁岩質の石材を用いた剥片である。15には折れ状の剥離面が複数みられるが、被熱によるハジケ痕の可能性も考えられる。頭部調整が施されている。16は、おそらく剥片剥離時の衝撃により、バルヴ付近を起点として縦に亀裂が走り、剥片が半割されている。背面の剥片末端部および打面には原礫面が残存しており、そのカーブの度合いから、およそ拳大程度の原石形状が想定されよう。打面調整および頭部調整が観察される。以上、12～16は第2トレンチからの出土である。

使用石材の齊一性、出土レベルのまとまりから判断するならば、11をのぞく第3トレンチ出土の遺物は細石刃石器群に属するものと捉えることが妥当であろう。また、ナイフ形石器などの成品の出土はみていないが、第2トレンチ出土の遺物の少なくともその一部および第3トレンチ出土の11については、その出土層位から推して、細石刃石器群を漸る時期の所産である可能性が高いものと考える。

遺物の出土がみられなかった他のトレンチも含めて、その地層堆積の観察所見からは、上記の石器群が残された当時のC区付近の地形は、比較的起伏に富んだ、現在よりもやや複雑な景観であったことが想像される。自然科学分析の結果なども踏まえ、これらの石器群がいかなる要因でこの地に残されたことになったのか、今後、考究の余地があろう。

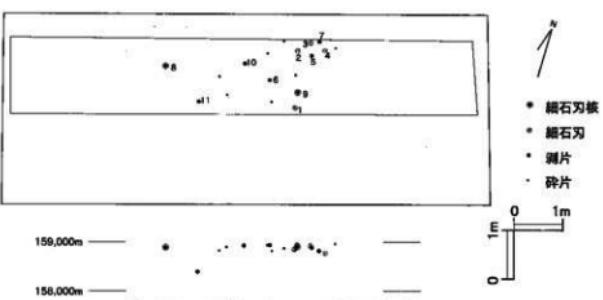
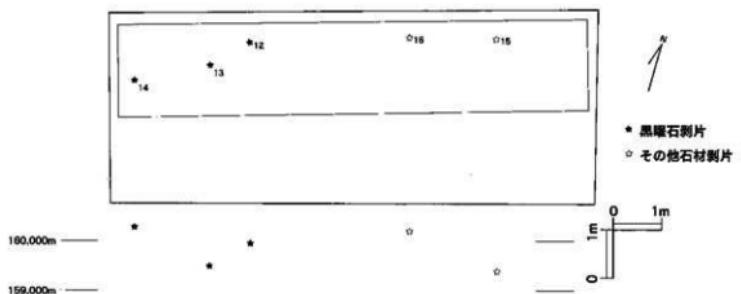
註

(2) 頭部調整および頭部形状の類型については、下記の文献を参考にした。

宮田栄二 「細石刃の打面と頭部調整について－細石刃製作技術の追求のために－」『九州旧石器』第4号 横昌信先生還暉記念特集号 九州旧石器文化研究会 2000



細石刃と細石刃核（S=1/1 番号は第6図に対応）



第三章 まとめ

A区

今回の概要報告では紙幅の都合もあり、あえて第1号道路状遺構のみをクローズアップして取り上げるという形を取った。ただし先述したように本遺跡からは約40条の溝状遺構ないし道路状遺構が検出されており、まずはそれらの内いくつを道路状遺構として認定することができるか、あるいは各遺構の前後関係・同時並存関係がどうなっているのかという問題を解決するために基礎整理作業を行なわなければならない。具体的には各遺構について平面分布の把握と土層断面の比較検討を進めていくことになるが、後者に関しては文明軽石層が鍵層として使用できる。今回の報告中でも第1号道路状遺構の土層断面における文明軽石層の堆積状況から、最深部の路面については埋没時期をほぼ特定できたと考えるが、上限・下限年代については現在のところ明らかにし得ていない。A区では2基の中世土坑墓から約30枚の錢貨が、また遺構外出土遺物として陶磁器や五輪塔（火輪）などが出土しているため、それらの年代観も勘案しつつ遺跡全体としての存続年代を明らかにしなければならない。

また遺というものはある場所から他の場所へと人間が往来することによって成立するものであるから、本遺跡に残された道路状遺構が「どこから来てどこに向かったのか」という問題が生じてくる。これについてはまず近接する大岩田村ノ前遺跡で検出された道路状遺構ならびに字「村ノ川」に存在したと伝えられる寺院、および周辺微地形の検討から始める必要がある。これら多くの課題については本報告の時点では明らかにしたい。

C区

報告した内容について、成果と今後の課題を簡潔に述べ、一応の総括としたい。

これまで旧石器時代の人類生活の痕跡に乏しかった都城市域においても、当該時代の遺物包含層の存在を確認できたことは大きな成果であろう。第3トレンチでは細石刃石器群の存在がその出土層位を含めて明らかとなった。調査面積は狭いものの、いわゆる野原・休場型の範疇に入る細石刃核が他型式のそれを含まない状況で検出されている。くわえて碎片・剥片を組成する事実からは、この場における細石刃剥離作業の行使が想定される。また、細石刃剥離以前の石核調整を示唆する稜付きの細石刃も2点検出された。今後の技術論的研究に寄与するところがあろう。成品の存在は確認していないが、第2トレンチおよび第3トレンチの一部の石器群は、その出土層位・使用石材などから、ナイフ形石器を組成する石器群の存在を窺わせる。火山灰分析の結果なども踏まえ、その性格と帰属年代については、慎重な検討を要しよう。また、今回は肉眼的分類のみにとどめたが、黒曜石の原産地分析なども、今後試みる価値はある。

これら人堀二時期にわたる石器群について、遺跡内分布などの検討あるいは本来的な器種組成の全容把握という作業は今回の調査条件では望み得なかった。とはいって、従来、分布上の空白地帯であったこの地にひとつの点が打たれたことの意義は大きい。大岩田上村遺跡の旧石器時代遺物について、その編年論・分布論的な位置付けを追究し、隣接地域の研究動向を視野に入れつつ、これを地域史のなかに組み込んでゆくことが今後に残された課題といえよう。

報告書抄録

ふりがな	おおいわだかみむらいせき							
書名	大岩田上村遺跡							
圖書名	農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う発掘調査概要							
卷次	第2巻							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編集者名	南正覚雅士							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2001年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
大岩田上村	宮崎県都城市大岩田町 6809番地他	45202		31度 41分 50秒 付近	131度 02分 57秒 付近	1999 11.17 ~ 2000 10.25	25,000m ²	農用地総合整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大岩田上村	散布地	旧石器		細石刃石器群	旧石器時代の細石刃石器群 中世の溝状遺構及び道路状遺構			
		縄文	整穴式住居跡	縄文土器				
		弥生	ピット群	弥生土器				
			溝状遺構	中近世陶磁器				
			中世	銭貨 五輪塔(火輪)				
	世	道路状遺構 土坑墓						

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第38集

おおいわだかみむら

大岩田上村遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

平成13年3月16日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 有限会社 鮎脈社
〒880-8551 宮崎県宮崎市山代町263
TEL 0985-25-1758 FAX 0985-25-7286